



Title	H.v.シーボルト著 『考古説略』と明治期の日本考古学
Author(s)	平田, 健
Citation	明治大学図書館紀要, 12: 139-156
URL	http://hdl.handle.net/10291/7286
Rights	
Issue Date	2008-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

H.v.シーボルト著『考古説略』と 明治期の日本考古学

平田 健*

緒言

日本考古学史上、初めて科学的な方法、研究姿勢によって行われた大森貝塚の発掘調査から本年は130年目にあたる。その成果は調査の2年後、1879（明治12）年8月に東京帝国大学理学部紀要第一巻第一号、*Shell Mounds of Omori*。（英文『大森貝塚』）として公刊された。本稿で紹介する『考古説略』は、英文『大森貝塚』刊行のわずか2ヶ月前に出版された最初の和文考古学概説書である。著者は Frantz von Siebold（フランツ・フォン・シーボルト）の次男、Heinrich von Siebold（ハインリヒ・フォン・シーボルト）¹。1869（明治2）年に来日し、オーストリア・ハンガリー公使館通訳となりウィーン万国博覧会の準備などに関わる傍ら、日本考古学、民俗学に関する研究を進めた（クライナー1980）。日本滞在中は、北海道から九州に至る貝塚や古墳を発掘し、また日本の考古家と交流を深めるなかで資料を収集していった。それらを基にまとめられた日本考古学の論文は、Deutschen Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens（ドイツ東洋文化研究協会）や、Berliner Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte（ベルリン人類学民族学先史学会）の機関誌に発表されている（SIEBOLD, 1875、1878、1879a）。

ハインリヒの調査・研究については、大森貝塚を発掘した E.S.Morse（エドワード・シルヴェスタ・モールス）やその他、外国人研究者の業績と比

*ひらた・たかし／明治大学文学部助手／日本考古学、考古学史

¹『考古説略』では Heinrich を「ヘンリー」と英語表記にしているが、本稿では独語表記「ハインリヒ」に統一した。

較して取り上げられることが多かった（八木・中村1905、清野1944a、佐原1984、関1985、杉山1992）。本稿では2004（平成16）年に明治大学図書館の収蔵となった『考古説略』を紹介し、併せてハインリヒの考古学研究を黎明期の日本考古学の中に位置付けることを目的とする。なお、本文中では煩雑になるため敬称を略すこと、また旧植民地名などは原本に準拠したことを予めご理解いただきたい。

1 『考古説略』の概要

『考古説略』の装丁は半紙本（23.5×16.0cm）で四つ目綴じ、角切れがある。表紙は濃緑色の厚手紙で、型押しによって考古遺物の図を打ち出ししており、前表紙には縦長の石匙に「考古説略」と書かれた題箋を貼付する（第1・2図）²。打ち出し紋様は主に古墳時代の遺物で、先史時代に属するものは石鏃、磨製石斧、独鈷石のみである。ハインリヒは滞在中、埼玉県の吉見百穴や近畿地方の古墳を調査し、また1871（明治4）年には日本の考古家を自邸に集め資料展覧会を開催している（柴田1903）。図柄は考古家との交流の中で見た資料や、自身が日本で購入・収集したものを参考にしたと思われる。裏表題³に続き、訳者吉田正春による序文が3丁、本文31丁、中扉、折込図版6葉、図版解説17丁、奥書という構成である。奥書には「明治一二年 月 奥地利國匈牙利國公使館属 編者出版人 ヘンリー、ホン、シーボルト」と記されている。なお、ハーバード大学エンチン研究所架蔵本⁴には更に「賣捌所 東京南鍋町一丁目五番地 文會舎」という記載がある。文會舎は鳥居邦太郎著『日本考古提要』（1889）、L. Johannes（ルイス・ヨハンネ）著、和田維四郎訳『金石學』（1886）など、博物学に関する書籍を発行しており、その関係で本書の販売所となっていたと思われる。

本文は章立てなど細目に分かれてはいないが、1）ヨーロッパ考古学に

²明大架蔵本には前表紙に旧蔵者の分類票、後表紙にバーコードが付されている。図案が確認できない部分については坂詰秀一先生（立正大学名誉教授）架蔵本に依拠した。また撮影は筆者による。

³1879（明治12）年6月に刊行（発兌）と記されている。

⁴佐々木憲一先生より頂戴した複写資料に準拠する。

表 3 時代法に基づく編年

時代	時期	特徴	墓	人骨*
石属世期 (石時代)	甲 (鴻古世期)	打製石器。火の使用。 マンムートなど絶滅種 が生息。	洞窟(元は居 住地)。	仏) オリガク洞穴 独) ネアンタ渓谷 白) エンギス洞
	乙 (中古世期)	甲代の石器に鋭利な鋒 刃を付ける。骨角器併 用。粘土の器を作る。	墳墓を築造。 入り口に扉、 内部は区画し 小室を設け る。	白) フロントル洞 仏) ウファエー、 マグイ洞 嘘) ボレベー墓
	丙 (新古世期)	磨製石器。石に穿孔し 装飾品を作る。		仏) ロノブリーブ穴
金属世期	鍍銅世期	銅と亜鉛を混合する 術。	平地に大石を 建て小石を羅 列し、その下 に石櫃を安 置。	—
	鉄世期	鍍銅製の器物(鍛造) と磨製石器が共伴。石 属世期から金属世期へ の移行期。 金銀の遺物を伴う。	火葬(茶毘)。	—

*遺跡名は原本に準拠した

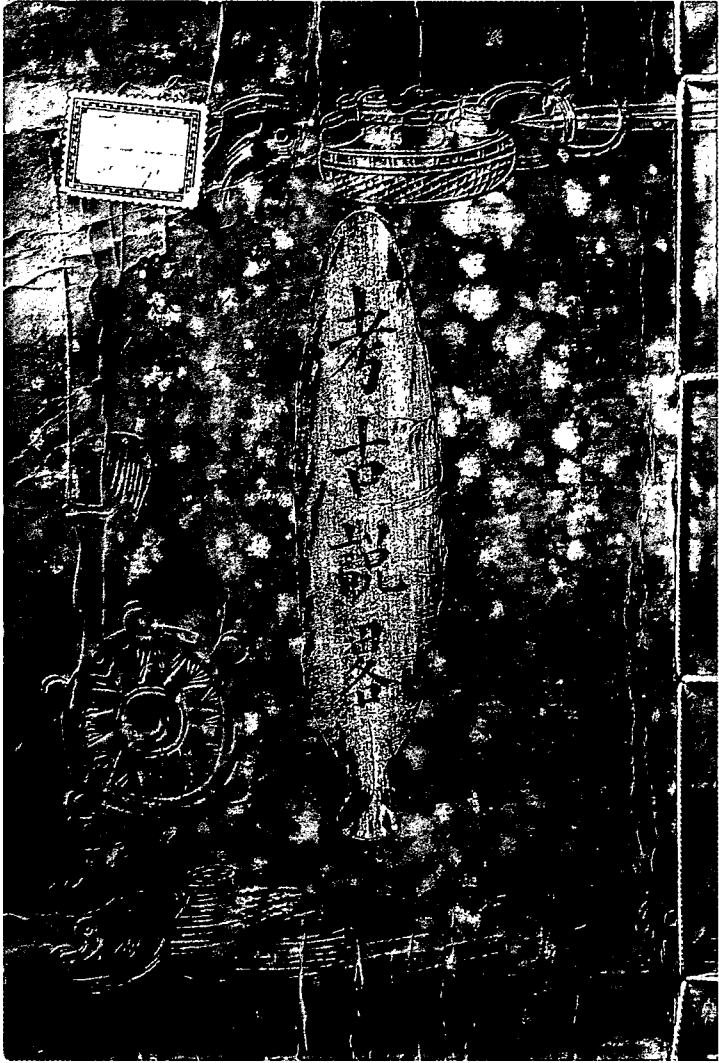
関する内容 2) 考古学の目的、日本考古学に関する内容 3) 日本人種論に関する内容という3つの内容で構成される。次に各項目について概略を述べる。

1) ヨーロッパ考古学に関する内容

『考古説略』は主にヨーロッパの考古学研究や出土遺物を紹介することを目的としている。その骨子となる時代区分については、C. J. Thomsen (クリスチャン・トムセン) が1836 (天保7) 年に発表した、石器時代(石属世期・石時代)、青銅器時代(鍍銅世期)、鉄器時代(鉄世期)という3時代法⁵に依拠している(表)。石属世期を3期に細分している点は後述するラボックの2期区分を発展させたと考えられ(芹沢1986)、これはまた6葉の図版にも反映されている。

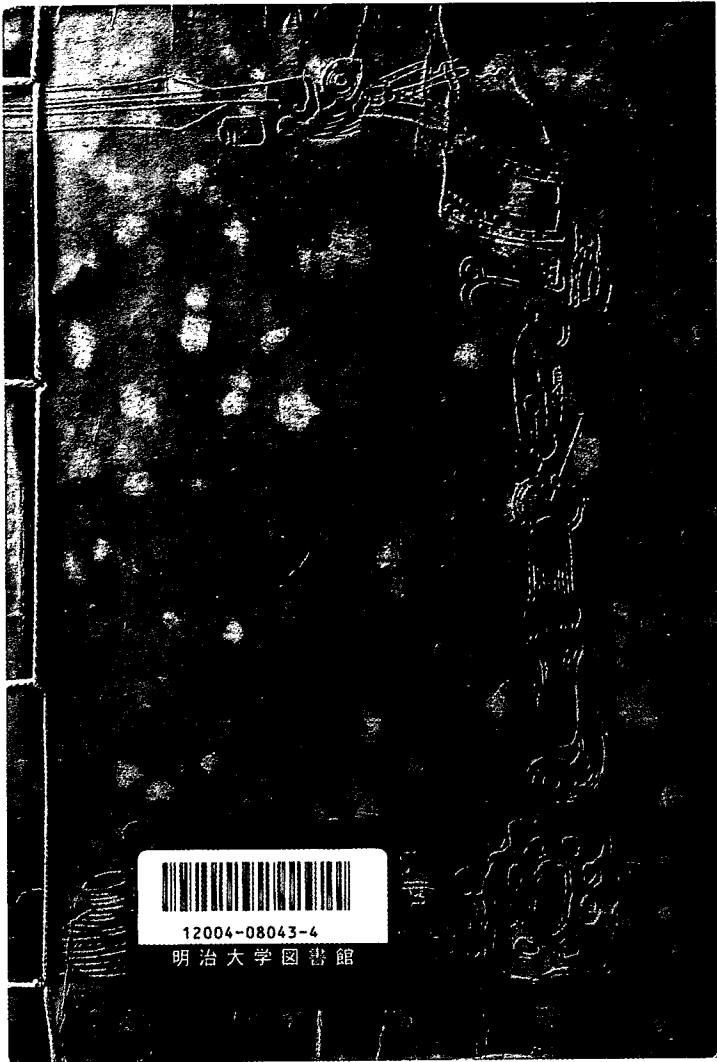
図形第一葉 石時代甲

⁵日本で最初に3時代法の記述がみられるのは1877 (明治10) 年、柴田承桂註『百科全書 古物学』(石期、黄銅期、鐵期)である。



【上小口右方から左回り】銅矛(鋒)—耳環—耳環—子持須恵器—勾玉—環頭柄頭—大
 刀—頭椎柄頭—五鈴鏡—勾玉—勾玉—勾玉—平瓶—管玉—管玉—耳環—石鏃—勾玉

第 1 図 【考古説略】前表紙



【下小口左方から左回り】勾玉—磨製石斧—短頸壺—勾玉—石鏃—鏡板—鐺—勾玉—
 一独鈷石—耳環—管玉—鈴—輪金具—壺鏡（甲冑？）—勾玉—管玉—銅矛（茎）
 ゴチック名はバーコード、ラベル部分

第2図 『考古説略』後表紙

図形第二葉	石属世期乙
図形第三葉	石属世期丙
図形第四葉	石時代の土器
図形第五葉	石時代の住居、墳墓
図形第六葉	石時代の頭骸骨、湖上住居

しかしながら、これらの時代区分は遺跡や遺物の説明に用いられた程度で、本書の中では付帯的に扱われている。また、図形第六葉一三～二十一、湖上住居の資料を石時代としているが、これはスイスの代表的な青銅器時代の遺跡、Möringen (モーリングゲン) から出土したものであり、ハインリヒがこの時代区分と出土遺物の関係を十分理解していたかは疑問が残る。

2) 考古学の目的、日本考古学に関する内容

ハインリヒは、人間が人生の基本を知り、その実況・実状を知ることによって過去を復元する意味を見出している。その方法として文字のない時代の伝承は考古学者であっても確認できず、「石鑿」(石斧) など考古遺物が唯一の証拠となるため、古代の遺物を考証し、遺跡を探訪しなければならないと主張する。考古学という学問について、吉田正春は序文の中で事物考古学と風俗考古学に分かれると述べているが、前者は出土遺物を対象とし、それが使用された時代を明らかにする研究、後者は民族事例を通して遺物の製作方法、用途を推定する研究を示している⁶。

こうして復元された過去と周辺諸国の文化を比較し、遺物の進歩状況(段階)を明らかにすることで、更には人種を確定できるとしている。ハインリヒは日本人の起源を追及する研究に対し「予輩思フニ盖シ是等ノ事ヲ判決シ得ルハ各日本人ノ必懇望スル所ナルベシ」と述べているが、これは日本の考古学・人類学界の動向をハインリヒが把握していたことを窺わせる。

また、採集した遺物を徒に宝器として尊崇し、価値があるものと評価してはならず、精巧な製作物を重要なものと判断すべきではないと戒め、遺物の発見地やその事実を詳細に記載する必要性を述べている点は、当時の

⁶例えば土器の項目では、最初に遺物の特徴を説明した後、民族例を挙げながら具体的な製作方法、用途を考察している。

日本考古学が珍しいものを集める『好古』という段階であり、学問として十分に確立していなかったことを示している。

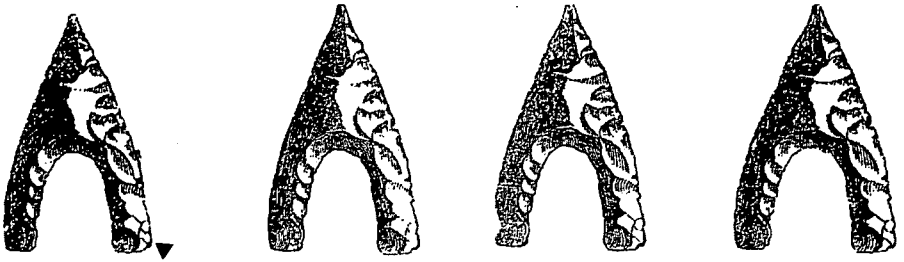
3) 日本人種論に関する内容

『考古説略』の中でハインリヒは、科学的方法による資料の収集と記述を通して日本の先史・原史時代が解明され、他国の資料と比較検討することで日本人の起源を明らかにできるという研究の道筋を示した。日本考古学に近代的な方法が持ち込まれた明治時代前半においては、日本人の祖先がどのような人種であるかという研究が中心であった。当時、最も古い遺物であった縄文式土器の使用民族については、アイヌ説と、アイヌ以外の人種、例えばモールスが主張したプレ・アイヌ説が存在した。

アイヌ説を最初に提唱したのがハインリヒの父、フランツであった。フランツは、石鏃が日本の北部から最も多く発見されているという事実について、この地方はエビスの国と呼ばれていることからエビスの国（エゾ）の居住者であるアイヌが石器使用者であると推測した。また勾玉の使用者である神武天皇以来の日本人がこの地に住んでいたアイヌと闘争した結果、ミカドの領地となったとも述べている（清野1944b）。このアイヌ説は *Nippon*.（独文『日本』）の中で展開されたものであり、当時の日本人研究者が目にするにはほとんどなかったと思われる。

ハインリヒは、東京近郊の貝塚から出土した土器について「其質狀及ヒ模様ヲ以テ案スルニ果シテ往古毛人⁷ノ供用セシモノナルベシ」とし、日本列島各地に見られる石器の製造者は国史に記載され、北海道、樺太、千島に住んでいる蝦夷であると主張した。それは、フランツの説を新たな資料で補うとともに「神武天皇ノ西南ノ國隅ヨリ龍飛シ來リ玉ヒシ以前ヨリ其居住ヲ占シ者ニテ乃チ蝦夷ト名稱スル人種ナリ」という『記』『紀』の神武東征神話に立脚したものであった。ハインリヒは独文『日本』や日本考古家との交流の中で神話に関する理解を深めたと思われる。また清野謙次が指摘しているように、ヨーロッパ人がアメリカ先住民族の土地を占領した類例を日本に求めた（清野1944a）、という時代的背景も考慮する必要があ

⁷蝦夷人の異称。



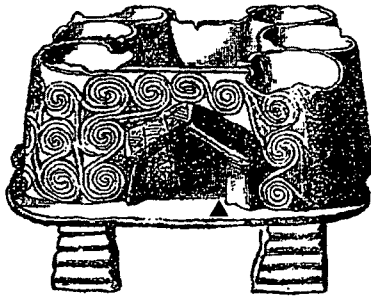
【考古説略】

第2版

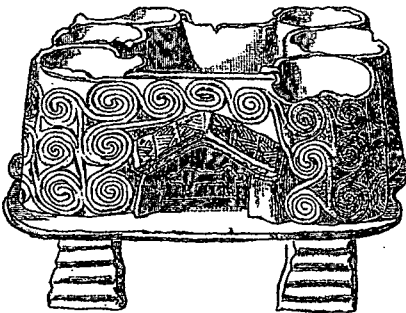
第3版

第4版

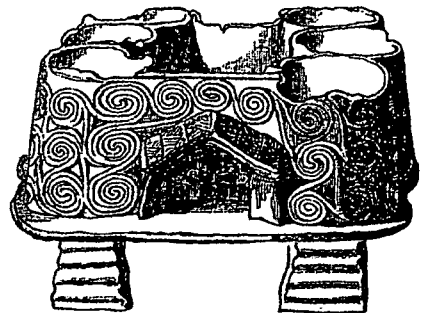
第3図 【考古説略】図形第一葉九 長脚鏃の比較（原図と同尺）



【考古説略】



第3版



第4版

第4図 【考古説略】図形第四葉二十五 特殊壺形土器の比較（原図と同尺）

ろう。

なお、日本人の直接の祖先は言語、身体、風俗、習慣が最も似ている琉球諸島周辺の住民と、支那、朝鮮半島の人種の混血であり、鉄器を持って西南日本より上陸し、アイヌを北方に駆逐しながら日本に定住したとハインリヒは結論付けている (SIEBOLD. 1879b)。

2 『考古説略』の参考文献

『考古説略』の図版6葉に掲載された全118図を見ると、線の太さ、描写方法、縮尺率などからいくつかの文献の図版を模写・転載していたことが想定される。佐原真は J. Lubbock (ジョン・ラボック) 著 *Pre-Historic Times*. (『先史時代』) を引用文献として挙げている (佐原1988)。引用文献の同定は本書の構成を明らかにするだけでなく、『考古説略』執筆時期の推定にもつながる。筆者が現在までに確認しているのは、『先史時代』；40図⁸、L. Figure (ルイ・フィギエ) 著 *Primitive Man*. (『太古人類』)⁹；16図、W. Boyd Dawkins (ボイド・ドーキンズ) 著 *Cave Hunting*. (『洞窟探求』)；10図、である。『太古人類』は1871 (明治4) 年、『洞窟探求』は1874 (明治7) 年刊行であり、来日後、オーストリア・ハンガリー大使館で通訳をしていた時期に出版された。

さて、主な引用文献であった『先史時代』については、1865 (慶應1) 年の初版から、『考古説略』が刊行される1879 (明治12) 年まで4版を重ねている。佐原はこのうち、1869 (明治2) 年出版の第2版を引用したと考えている (佐原1988)。確かに『考古説略』図形第一葉二、三の図は初版にはなく、第2版以降掲載されるようになってきているが、それ以外の図版については第2版から第4版の間に変化はない。そこで、『考古説略』と各版の図を個別に比較し、描画方法に違いがないかを確かめることとした。

第3図は『考古説略』図形第一葉九の長脚鏃である。脚部右下端の稜線に注目すると、『考古説略』では細線を用いて明瞭に剝離面を描いているの

⁸セミコロン以下の数字は『考古説略』図形中に転載されたと考えられる図数。

⁹L. FIGUIER. 1870. *L' homme Primitif*. の英訳版。

に対し、第2版では線が曖昧に表現されている。初版も第2版と同様の描写であるから、稜線を明瞭に描くのは第3版以降であるといえる。次に第3版と第4版については、スイス湖上住居から発見された装飾土器を比較する(第4図)¹⁰。線の太さや陰影の描写など第3版と第4版の違いは明瞭であるが、例えば土器正面の家形装飾の入口付近に表現された影は、第3版では太い点線であるのに対し、第4版では細かくなっている。『考古説略』は細かい点線であり、またその他の図版を比較した結果、第4版を原本として図を作成していると判断できる¹¹。『先史時代』第4版の刊行は『考古説略』出版の前年、1878(明治11)年である。引用している図版が最も多いことなどから、本書は約1年程度で構想、執筆されたと考えられる。

3 『考古説略』と英文『日本考古学』

ハインリヒは『考古説略』の中で考古学の目的、方法など理論的な内容を展開した。それらを日本の考古資料に基いて実践し、文献史料を援用しながら先史・原史時代について概述したのが *Notes on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age*。(英文『日本考古学』)¹²である。清野謙次は欧米の遺跡・遺物は日本人に珍しかったため和文で、日本考古学は日本人に平凡であるから英文で書いて海外に紹介しようとした、と解説している(清野1923b)。しかし、ヨーロッパの考古学を和文で、日本考古学を英文でまとめたのには別の理由があったと思われる。

『考古説略』では日本で出土する石器がヨーロッパ、また当時の南洋原住民が実際使用しているものと同じであるとし、これらの人種が石属世期の段階にあると述べられている。また、石属世期が各国で同じ時間幅を持っていないとするなど、ハインリヒには先述した時代区分が、汎世界的に通

¹⁰本資料は青銅器時代に属するが、ハインリヒは石時代の土器(図形第四葉)として説明している。

¹¹原典が未確認の図版は、スイス湖上住居関係(図形第四、六葉)、墳墓関係(図形第五葉)、人骨関係(図形第六葉)であり、恐らく3、4冊程度の文献から引用していると思われる。

¹²本書は斎藤1979に再録されており、また関俊彦、関川雅子による全訳がある(関・関川1981)。

用するものであり、時間差はあるものの各地域で同じ段階を辿るという認識があった。考古学の目的として「他ノ國ノ工作ト比較シテ彼我器財ノ位度ハ如何ナル進歩ナリシヤヲ明瞭ニシ」とも述べていることから、『考古説略』には日本の先史・原史時代がどの段階に属するかを理解するための、目録という性格が含まれていたと考えられる。

一方、ヨーロッパでは19世紀後半に3時代法、旧・新石器時代の区分が提唱され、編年が確立されつつあった。だが、ヨーロッパ以外の地域でも同様の編年を辿るのかについては、資料的制約から十分な検討ができなかった。英文『日本考古学』では金属器を伴う磨製石器の時代と、打製石器の時代という時代区分を採用しているが、青銅の耳環の他に腕輪を使用する時代として、初期青銅器時代¹³という概念もみられる。打製石器や縄文式土器のほか、勾玉や耳環、人物埴輪の写真を12葉掲載していることから、ハインリヒが日本考古学について英文で発表したのは、こうした時代区分を検証するための資料を欧米の研究者に提供する意図があったと思われる。それに関連して興味深いことは、ラボックの『先史時代』第4版で「中国・日本の先史時代についてほとんど知らない」という記述が、英文『日本考古学』刊行の後、明治25（1892）年に出版された第5版では「ほとんど知らない。ただし最近の研究では、鉄使用に先だって青銅が、青銅使用に先だって石が使われた点まで分っている」と加筆されている点である（佐原1985）。ラボックの追記とハインリヒの研究を直接結びつけることはできないが、英文『日本考古学』をはじめ独語論文が、ヨーロッパの考古学界において日本の考古遺物や先史時代を紹介するという役割を担っていたことは確かであろう。

それに対し明治期の考古学者は、『考古説略』に日本最初の考古学出版物という名誉を与え（坪井1887、八木・中村1905）、また archaeology/archäologie を初めて「考古學」¹⁴と和訳したもの（和田1932）と位置付けている。しかしこうした評価は、「歐州の事實のみを編せしものにて翻譯と云ふ

¹³Besides these objects of the early bronze period in Japan, larger rings called “*Udē wa*” or Arm-rings have been discovered, (pp.16, 1.27)

¹⁴「考古學」という言葉自体は明治10（1877）年、文部大輔田中不二麿の記した『大森村古物發見ノ概記』が初見である。

方適當なる可く」(八木1898)というように、その内容を十分に踏まえたものではなかった。該期の考古学者は外国人研究者の業績と日本人の研究に一線を画しており(坪井1904)、その背景について山内清男が興味深い指摘をしている(山内1970)。だが、ハインリヒは坪井らが設立した東京人類學會に1886(明治19)年に入会しており(坪井1886)、また坪井が編集していた同人誌『小椀雑誌』52号には英文『日本考古学』に関する記述¹⁵も見られること(坪井1904)から、全く影響がなかったとは考えにくい。清野謙次は「考古説略は日本語で出版せられた世界考古學一般的研究著述の嚆矢であらう」(清野1923b)と述べた上で、現存の土俗学から先史・原史時代の考古学を復元する坪井の研究姿勢にはモールス、ハインリヒの影響があったとみている(清野1944a)。筆者もまた事物考古学と土俗考古学という枠組みと、坪井の人類学という構想に重複する点があると考えている。しかし、それが『考古説略』や外国人研究者の影響によるものかは、坪井正五郎の研究史を紐解くなど更なる検討が必要となろう。

結語

独文『日本』や『考古説略』などに端を発する日本人アイヌ説と、モールスの提唱したブレ・アイヌ説はその後、小金井良精や鳥居龍蔵(アイヌ説)と坪井正五郎(コロボックル説)の論争として日本考古学、人類学研究の中核を形成していく。明治期の日本考古学はこの意味においてハインリヒ¹⁶、モールス等の研究から発展していったと評価できる。しかし、3時代法は三宅米吉の『日本史學提要』(三宅1886)にみられる程度¹⁷で、考古学の目的など本質的な部分が必ずしも継承されていたとはいえない。これは、英文『大森貝塚』の報告書としての様式や作図方法が、陸平貝塚の報告書(IIJIMA.&SASAKI.1883)以後受け継がれなかったことと類似してい

¹⁵「日本古物雜記(シーボルト原著)」

¹⁶青銅器時代の誤認している点や、著作・論文にヨーロッパ考古学に関するものが含まれないことから、ハインリヒは考古学ではなく、日本の考古遺物に関心があったと考えられる。

¹⁷「石器時代」「銅器時代」。但し、三宅は『考古説略』ではなくラボックの『先史時代』を参考文献として挙げている。

る。

坪井正五郎が考古学の定義を明示し(坪井1896、1900)、遺跡発掘の重要性や出土資料の分析方法など、技術的な側面に言及した(坪井1894a、1894b)のが1897(明治30)年前後である。また八木燐三郎が日本の先史・原史時代を体系的に捕らえた『日本考古學』を著したのは1898(明治31)年(八木1898)、1899(明治32)年(八木1899)であった。考古学が日本人研究者によって学問として整備されはじめるまでには、『考古説略』公刊後、なお20年近くの時間を要したのである。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、資料の閲覧、写真撮影、他研究機関への紹介など明治大学図書館の全面的なご協力を賜りました。また以下の方々、研究機関よりご教示を賜りましたこと、ここに明記し御礼申し上げます(順不同・敬称略)。

石川日出志、草野潤平、坂詰秀一、佐々木憲一、塚越理恵子、柘植信行、日隈広志、藤沢正明、本間岳人、大阪市立大学学術情報総合センター、京都大学文学研究科図書館、品川区立品川歴史館、天理大学附属天理図書館

参考文献

- [1] 清野謙次1923a「考古漫録 ジーボルト氏の日本考古學と、ミルン氏の日本石器時代に關する著書」『社會史研究』9-5、pp.29-34、日本學術普及會
- [2] 清野謙次1923b「考古漫録 ジーボルト氏の考古説略」『社會史研究』10-3、pp.23-25、日本學術普及會
- [3] 清野謙次1943a「ジーボルト氏の日本考古學とミルン氏の日本石器時代に關する著書」『増補版 日本原人之研究』pp.337-340、荻原文星館
- [4] 清野謙次1943b「ジーボルト氏の考古説略」『増補版 日本原人之研究』pp.345-348、荻原文星館
- [5] 清野謙次1944a「大森介壺古物篇と英文日本考古學 附、明治十一二

- 十年代に於ける外人の日本考古學とアイヌ研究」太平洋協會編『日本人種論變遷史』 pp.251-271、小山書店
- [6] 清野謙次1944b「大シーボルトの『日本』と小シーボルトのアイヌ研究」『太平洋に於ける民族文化の交流』 pp.247-266、創元社
- [7] 清野謙次1946a「日本石器時代人アイヌ説」『日本民族生成論』 pp.22-32、日本評論社
- [8] 清野謙次1946b「シーボルト父子」『あんとろぼす』1-2、pp.22-25、山岡書店
- [9] 清野謙次1949a「日本石器時代人アイヌ説」『古代人骨の研究に基づく日本人種論』 pp.27-35、岩波書店
- [10] 清野謙次1949b「日本人種論に及ぼせし歐米學說の影響」『古代人骨の研究に基づく日本人種論』 pp.55-58、岩波書店
- [11] 清野謙次1954『日本考古學・人類學史』上卷、岩波書店
- [12] 桑野禮治1897「外人ノ日本考古學ニ關スル研究」『考古學會雜誌』1-4、pp.179-182、考古學會假事務所
- [13] 斎藤 忠1974『日本考古学史』吉川弘文館
- [14] 斎藤 忠1979『日本考古学史資料集成』2、明治時代一、吉川弘文館
- [15] 斎藤 忠1997「『考古説略』」『日本考古学文献総覧』 pp.6-7、学生社
- [16] 坂詰秀一・本間岳人2007『日本考古学は品川から始まったー大森貝塚と東京の貝塚ー』品川区立品川歴史館
- [17] 佐原 真1984「シーボルト父子とモースとー日本考古学の出発ー」『月刊文化財』250、pp.32-36、文化庁文化財保護部
- [18] 佐原 真1985「ラボック・トムセン・シーボルト・モンテリウス詣で」『論集 日本原史』 pp.835-863、吉川弘文館
- [19] 佐原 真1988「日本近代考古学の始まるころ <モース、シーボルト、佐々木忠次郎 資料に寄せて>」守屋毅編『共同研究 モースと日本』 pp.247-293、小学館
- [20] 柴田常恵1903「武藏の古墳」『東京人類學會雜誌』18-207、pp.340-352、東京人類學會
- [21] 杉山莊平1980「明治期における日本考古学界について」『小田原考古

- 学研究会報』9、pp.90-97、小田原考古学研究会
- [22] 杉山莊平1992「H・シーボルトと吉田正春のこと」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』pp.37-50、大阪・郵政考古学会
- [23] 関 俊彦・関川雅子(訳)1981「先史・原史時代の日本—H・V・シーボルト著『日本考古学』—」『史誌』16、pp.111-143、大田区史編さん室
- [24] 関 俊彦1985「ハインリヒ・シーボルトと日本考古学」森浩一編『考古学の先覚者たち』pp.117-130、中央公論社
- [25] 関野 雄1968「『考古学』と『発掘』」『言語生活』201、pp.56-57、筑摩書房
- [26] 芹沢長介1986「日本旧石器時代研究小史」『考古学ジャーナル』271、pp.7-11、ニュー・サイエンス社
- [27] 坪井正五郎1886「記事」『東京人類學會報告』1-8、pp.145、東京人類學會
- [28] 坪井正五郎1887「人類學會當今の有様 第一篇」『東京人類學會雜誌』2-18、pp.267-280、東京人類學會
- [29] 坪井正五郎1894a「日本に於て石器土器を採集し研究するに付きて注意すべき諸件」『史學雜誌』5-7、pp.1-15、史學會
- [30] 坪井正五郎1894b「日本に於て石器土器を採集し研究するに付きて注意すべき諸件 (承前)」『史學雜誌』5-8、pp.1-8、史學會
- [31] 坪井正五郎1896「考古學の眞價」『考古學會雜誌』1-8、pp.1-5、考古學會事務所
- [32] 坪井正五郎1900「考古學とは何ぞ」『考古』1-6、pp.1-4、考古學會
- [33] 坪井正五郎1904「東京人類學會滿二十年紀念演説」『東京人類學會雜誌』20-223、pp.1-12、東京人類學會
- [34] 中谷治字二郎1930『日本石器時代文獻目録』岡書院
- [35] 邊見 端1986「訳語“考古学”の成立—明治十年初見説をめぐって—」『日本歴史』457、pp.83-92、日本歴史学会
- [36] ヘンリー・ホン・シーボルト (吉田正春訳) 1879『考古説略』
- [37] HEINRICH VON SIEBOLD (神保小虎抄訳) 1886a「人種學上アイノノ研究」『東京人類學會報告』1-6、pp.115-118、東京人類學會
- [38] HEINRICH VON SIEBOLD (神保小虎抄訳) 1886b「人種學上ア

- イノノ研究 第二』『東京人類學會報告』1-7、pp.142-144、東京人類學會
- [39] HEINRICH VON SIEBOLD (神保小虎抄訳) 1886c 「人種學上アイノノ研究 第三』『東京人類學會報告』1-8、pp.170-173、東京人類學會
- [40] ねずまさし1947「考古學から見た日本古代社會」『日本古代社會』I、pp.33-82、日本讀書購買利用組合
- [41] 三宅米吉1886『日本史學提要』第一編、普及舎
- [42] 八木奘三郎1898『日本考古學』上巻、嵩山房
- [43] 八木奘三郎1899『日本考古學』下巻、嵩山房
- [44] 八木奘三郎・中村士徳1905『考古學研究法』春陽堂
- [45] 八木奘三郎1916a「坪井博士とコロボツクル論」『人類學雜誌』31-3、pp.78-83、東京人類學會事務所
- [46] 八木奘三郎1916b「坪井博士とコロボツクル論(續)」『人類學雜誌』31-4、pp.126-131、東京人類學會事務所
- [47] 山内清男1970「鳥居博士と明治考古学秘史」『鳥居記念博物館紀要』4、pp.33-36、徳島県立鳥居記念博物館
- [48] ヨーゼフ・クライナー1980「もう一人のシーボルトー日本考古学・民族文化起源論の学史からー」『思想』672、pp.68-83、岩波書店
- [49] ヨーゼフ・クライナー1982「ヨーロッパの博物館に所蔵される日本民俗学関係コレクション」『月刊文化財』231、pp.10-17、文化庁文化財保護部
- [50] 和田千吉1932「本邦考古學界の回顧」『ドルメン』1-1、pp.10-11、岡書院
- [51] W. B. DAWKINS. 1874. *Cave Hunting, Researches on the Evidence of Caves Respecting the Early Inhabitants of Europe.*
- [52] L. FIGUIER. 1871. *Primitive Man.*
- [53] I. IJIMA.& C. SASAKI. 1883. "Okadaira Shell Mound at Hitachi" (*Memoir Vol.I.PartI. of the Science Department, Tōkiō Daigaku*).
- [54] J. LUBBOCK. 1865. *Pre-Historic Times, as Illustrated by Ancient*

- Remains, and the Manners and Customs of Modern Savages.* (1st ed.)
- [55] Sir J. LUBBOCK. 1869. *Pre-Historic Times, as Illustrated by Ancient Remains, and the Manners and Customs of Modern Savages.* (2nd ed.)
- [56] Sir J. LUBBOCK. 1872. *Pre-Historic Times, as Illustrated by Ancient Remains, and the Manners and Customs of Modern Savages.* (3rd ed.)
- [57] Sir J. LUBBOCK. 1878. *Pre-Historic Times, as Illustrated by Ancient Remains, and the Manners and Customs of Modern Savages.* (4th ed.)
- [58] E. S. MORSE. 1880. “Some Recent Publications on Japanese Archaeology” (*The American Naturalist*, Vol.14, No.9, 656).
- [59] H. V. SIEBOLD. 1875. “Etwas ueber die Tsutschi Ningio” (*Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens*, 1/8, 13).
- [60] H. V. SIEBOLD. 1878. “Etwas über die Steinzeit in Japan” (*Verhandlungen der Berliner Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte*. Jahrgang 1878, 428).
- [61] H. V. SIEBOLD. 1879a. “Japanische Kjökkenmöddinger” (*Verhandlungen der Berliner Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte*. Jahrgang 1879, 231).
- [62] H. V. SIEBOLD. 1879b. *Notes on Japanese Archæology with Especial Reference to the Stone Age.*

追記

脱稿後、石属世期の3期細分案について、「中石器時代」という概念が Hodder M. Westropp (ホダー・ウェストロップ) の『先史の状態』中に提示されていることが判明した (八木1898)。原典は1872年に刊行された *Pre-Historic Phase, or, Introductory Essays on Pre-Historic Archæology.*

と考えられる。本書未見のため詳細は不明であるが、ハインリヒが『考古説略』をまとめる上で参考にした可能性のある文献として付記しておきたい(2008年2月20日)。